

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

真の文理融合とは

洛友会会長 松本 紘



新年、おめでとございます。

皆さんは文理融合という言葉に何を連想されるでしょうか。例えば行政や企業経営を推進するにあたり、文系の分野で達成すべきニーズが発生し、理系の分野に対して目標達成のための研究やコンサルティングを依頼する場合があります。一方、理系の分野で優れた自然科学の研究成果や技術革新が興り、これらを社会実装する段階での法整備やルール作り、規制といった理系に端を発しながら文

系に果たすべき役割が求められる場合もあります。端的な事例として車の自動運転技術の発達に伴う交通ルール、事故発生時の責任所在の問題や、シンギュラリティと呼ばれるレベルまでAIやITが発達するときの法体系や抑制管理技術といった問題などは、近い将来に文理が協力して解決すべき課題と考えられます。

文理が協力する場面においては、総合的な見地から互いの意見を建設的に傾聴する必要がありますが、私が学内や組織をまとめる立場の時に感じたこととして、往々にして文系の中に「理系の人には専門分野に秀でてはいるが、総合的な考え方をしない傾向がある」、一方で理系の中に「文系の人には課題ばかりを論ずるが、具体策は理系任せにする傾向がある」

といった先入観や偏見のようなものの存在がありました。これらは単なる偏屈さだけに起因するものではなく、自身の仕事に精通してきた人に特有の、所属分野に対する一種の誇りの表れと理解することができるとも思います。

学生の皆さんや社会に出た初期の若い世代の方々は、まず「自身の専門を磨く」ことが肝要だと思います。私自身の経験を少しお話ししますと、学生時代の恩師や良き先輩に恵まれ、貴重なご指導ご助言に基づきながら、本質的には自身に強い興味を湧き仕事に打ち込めると感じた「宇宙プラズマ物理学」「宇宙電波工学」を専門分野として研究に取り組みました。重要で難解な問題に直面した時は、課題にチャレンジする強い意志をもって、とことん悩み、寝ても覚めても考え続け、ふとしたことから解決の糸口を掴んだ経験があります。また人がひとりではできないことには限界がありますので、先人の書物や論文を読み、先輩や仲間と真剣に議論することが仕事の成果に繋がる、また自身を磨くうちに熱意が人を通じて他者の協力を得られ、良好な人間関係に結び付いていくものだと思います。ぜひ若い会員の方々に自身の専門を磨き、自らの仕事が他分野や広い世界にどのように繋がっていくの

か、それを礎として文系を含めた他分野へと交流の輪を拡げていたきたいと思います。

中堅以上の会員の皆さんの中には、若い頃には電気系の専門的分野の仕事をし、様々な経験の後に、企業経営や部門責任者など組織を代表する立場に就いている方も多数おられると思いますが、組織をマネジメントすることは、ある意味で文理融合を実践していると思います。組織の中には文系の人も理系の人も存在します。ややもすれば縦割りになりがちな各部門の知識や技術に横串を通して、部門最適を組織全体の最適にする舵取りを行うことは、マネジメントの本質の一つと言えるのではないのでしょうか。

地球環境問題、自然災害リスク、地政学リスク、人口、資源、食糧問題といった世界的な課題から、日常の仕事で発生する諸課題まで、文理が協力して取り組むべき課題は枚挙にいとまがありません。洛友会の皆様がそれぞれの立場で、様々な場面での文理融合に貢献されることを期待いたします。本年も皆様のご健康とご多幸、並びに益々のご活躍を心より祈念しております。

迎春

二〇二五年一月一日

本部役員

顧問 荒木光彦
会長 松本紘
副会長 福田隆史
北條博史
川上養一

支部長

北海道 木元伸一
東北 伊藤篤
東京 角田泰之
北陸 笠原禎也
中部 小森憲昭
関西 小安隆昭
四国 小嶋唯司
中国 前田耕一
九州 能見和司

本部幹事

北野正雄
和田修己
和田進
萩原朋道
松尾哲司
佐藤高史

ベトナム正月あれこれ

四国支部長 小嶋 唯司 (昭54年卒)



洛友会会員の皆様、あけましておめでとございます。昨年は正月早々能登半島で地震が発生し、大変な目に会われた方も大勢おられました。今年こそは大きな自然災害もなく、平和に過ごせることを祈念するばかりであります。

四国支部長として巻頭言の寄稿依頼をいただきましたので、筆不精ではありますが、少しでも皆様の参考になればと思います。パソコンに向かっております。最初に簡単に自己紹介をいたしますと、昭和56年電気工学修士課程修了で岡田研でお世話になりました。研究テーマは超電導エネルギー貯蔵装置のエネルギー入出力制御で、制御回路の設計および製作を行い、とりあえず一定の成果は出したと

記憶しております。超電導コイル冷却に使用したヘリウムを大きな風船で回収し、リヤカーで農学部などに運んだり、研究室で野球や卓球などのスポーツを楽しんだ記憶のほうが多いのではあります。その後は四国電力株式会社就職し、約33年間勤務した後、株式会社四電工、そして四変テック株式会社に移り、現在も勤務しております。

さて昨今、日本も半導体工場が誘致できるなど明るい未来が見えておりますが、発展する国といえば身近では東南アジアの国が思いつきます。中でもベトナムは過去の不幸な戦争や今なお隣国との軋轢を抱えながら、全方位外交で発展している国であります。ベトナムのハノイには現在勤めている会社の子会社がある関係で時々出張しておりますので、少しベトナムについてお話ししたいと思います。

内の移動には鉄道と航空機の利用が一般的です。ベトナムを南北に縦断する「統一鉄道」は、北部ハノイから南部ホーチミンを結び、地方から都市間の移動や観光だけでなく、貨物輸送においても重要な役割を果たしています。ベトナムが南北に分断されていた時代、鉄道も北部と南部に分断されており、南北が統一され鉄道が一つとなったのを機に、「統一鉄道」と呼ばれるようになりました。ただ列車の運行速度は決して速くなく、ハノイからホーチミンまでの移動には30〜40時間ほどかかります。飛行機での移動が約2時間であることを考えるとかなりの長旅ですが、車窓からはベトナムの美しい自然を楽しむこともできます。

統一鉄道の発着地ともなっているハノイ、ホーチミンは、いずれも大都会で多くの外国企業が進出してきています。私もが進出しているハノイは昔からの街並みも多く残っており、旧市街といわれるところは雑多な店が所せましと並んでおり、値段も交渉次第の所が多く、気弱な日本人には向きません。スーパーマーケットやコンビニがありますので、買い物はそこで済ませたほうが簡単かも。観光はお寺や教会、ホーチミン廟などがありますが、戦時中の建造物も多く

残っています。郊外では車で3時間ほど東に走れば世界遺産に登録された風光明媚なハロン湾が有名で、世界中から多くの観光客が訪れています。

さて、正月の話に戻りますが、日本の正月は1月ですが、ベトナムでは2月の旧正月を盛大にお祝いする風習があります。旧正月(通称:テト)では、故郷に帰省し家族・親戚との一家団らんを楽しむのが定番となっています。その為、休暇になるや否や一目散にバスやバイクで帰省しますが、バイクの場合1台に4〜5人乗りで帰省する強者もあり、日本ではまずお目にかかることのない光景に圧倒されてしまいます。ハノイ市内では、テトの間はほとんどのお店、飲食店が閉店となり、市内も閑散とした状況に様変わりし、外国人や都市部の富裕層は海外脱出で各空港は大変混雑します。

また弊社のベトナム工場では、テトを迎える前に工場にニューイヤーパーティーを開催しています。普段は製品入出庫で使用しているプラットフォームを即席ステージとして活用、また外部のイベント会社より司会進行役を調達するなど、年に一度の一大イベントとしてとりおこなわれることもあり、娯楽の少ないベトナムでは、例年ほとんどの従業員が小さなお

祝いの準備が整ったと、おめでとございます。今年こそは大きな自然災害もなく、平和に過ごせることを祈念するばかりであります。

迎 春

二〇二五年一月一日

公益財団法人
京都技術科学センター

理事長 田中 一義
副理事長 山田 啓文

公益財団法人
応用科学研究所

織田中プリント



子様づれで参加されます。パーティーでは、工場の廃材で作った衣装をまとってのファッションショー、従業員がチーム毎にアオザイと呼ばれる民族衣装で演舞を競ったりと華やかさの中にユーモラスもあり老若男女が楽しめる催しになっています。まだ私は参加したことはないのですが、今年はホテルで盛大に行うとのことなので、日本から駆けつける予定です。

ここで、今後旅行される方のご参考までにベトナムあれこれについて、少しお話ししたいと思えます。なお、私が見聞きした情報なので正確とは言えませんがそこはご容赦願います。

旅の楽しみは食事ですが、ベトナム料理は魚醤(魚を原材料とした醤油)文化なので醤油文化の日本人には親しみやすいと思えます。定番は春巻きや米の麺を出汁につけたフォー、エビやカニ料理などがおいしくいただけます。過去にフランス領であったこともあり、フランスパンに具材を挟んだバインミーも有名です。凝った料理もおいしいですが、これら庶民の料理もなかなかいけます。香草のパクチーはよく東南アジアの料理に使用されます。これは日本人になじみがないので、合わない方もおられますが、タイに比べてベトナムのパクチーはマイルドな味

です。ただ衛生状態がよくないので露店などでは食べないのが無難です。ちなみにホテルでも飲料水はペットボトルです。

またベトナムはコーヒーの産地で世界第2位の生産量があり、パニラ味の濃いコーヒーにコンデンスミルクを入れた甘いコーヒーが代表的な飲み方です。個人的にはブラックが好みなので、あまり現地で飲んだことはなく、お土産に買って帰る程度です。ジャコウネコが食べて排出した種のコーヒーもありますが、味の違いはよく分かりません。只々高価なのが印象的です。カカオの生産量も多く、チョコレートも有名です。日本のチョコレートよりはカカオの含有率が多く、苦みがありますがポリフェノール効果で健康には良いかと思えます。あとはナッツやフルーツが多いですね。お土産には生の植物は日本に持ち込みが禁止されていますので、加工品にはなりますが種類は豊富で味も良いものがあります。当たり外れがありますが。

ベトナムは若い人が多く、国民の平均年齢が30代。所得は低いので車よりバイクが自家用車で、ラッシュ時の交差点はバイクが何列にも並んで信号が変わるのをまっており、さながらレースのようです。信号があっても無視する

バイクも多く、道をわたるのが旅行初心者の中には怖く、市内中心部の大通りではまだ一人で渡ったことがありません。安全第一です。とはいえ、成熟した日本と比べると、活気があり、これから成長するのが楽しみな国だといえます。引き続き日本と良好な関係を保っていたら、お互いに発展できればと願っております。

教室だより

エレクトロニクス・サマーキャンプ報告2024

電気電子工学科学部生を対象に、夏休みを利用して電気電子工学の面白さ・奥深さを体験するイベント「エレクトロニクス・サマーキャンプ」を開催しました。2020年、2021年の新型コロナウイルス感染拡大防止による中止を経て、一昨年から通常開催に戻り、今年も例年通りの開催となりました。最近では電子工作やプログラミングなどの経験をほとんどせずに入学してくる学生が増えています。彼らは、電気電子工学が身の回りのさまざまなところで利用されていることに思いが至らず、専門科目に対する興味や学習意欲になかなか火が付きませ

ん。学科として、この問題は極めて重大と考え、さまざまな取り組みをおこなっており、その一つがサマーキャンプの実施です。今年度のサマーキャンプは9月27～29日の日程で吉田キャンパスにて開催しました。1～3年生を対象とし、単位は付与せず、学生本人が自主的に参加する形式を取っています。多くの方々のご支援をいただき、今年度で16回目の開催となります。

サマーキャンプでは与えられた課題に3日間をかけてじっくりと取り組み、創意工夫や試行錯誤を積み重ねます。明確なゴールを用意しないことで、参加者の数だけアイデアが生まれることもサマーキャンプの大きな特色です。キャンプと称してはありますが、実際に宿泊するわけではありません。ただ、時間を気にせず、仲間とコミュニケーションを密にしてキャンプの気分が充実した時間を過ごそうという意味でこの名称を使っています。実際のところ、最終日前夜には何人かの学生が徹夜で製作・調整に取りくんでしまうのも恒例となりつつあり、彼らとそれに付きあったTAにとっては名実ともにキャンプとなっています。最終日にはコンテストという形で学生達には学科長名で賞を授与していま

す(後援の洛友会からは副賞として数千円の図書カードを贈呈)。また、学部時代に参加してくれた学生が大学院生となり、TAとしてサマーキャンプの企画・運営として活躍してくれています。今年度は、14研究室から24名のTA(学部4年生、大学院生)が参加してくれました。学生TAが主体的になつて企画・運営をおこなう姿は学部生にとっても良い影響を与えています。また、サマーキャンプに参加した学生が研究室に配属されて活躍しているという話もよく耳にします。このように学生主体のイベントとして確立しています。各学年の課題は以下の通りです。

1年生「LEGO Mindstorms」によるロボット製作

サッカーをベースとしたオリジナルの対戦競技で、マクスウェルが提唱した思考実験をヒントにした課題「マクスウェルの悪魔」を実施しました。ロボット機体としてはLEGO Mindstorms EV3をもちいて、それぞれが作成したプログラムにしたがって完全自律動作を行います。GUIベースとした専用のプログラム作成ソフトを使用しながら、カメラセンサーをはじめとした種々のセンサーを使いわけ、所望の動作をプログラムします。楽しみながらも電気電子工学

の一端にふれることができ、1回生競技として10年以上継続しています。

ルールは次のとおりです。まずコートをもつに分け、それぞれの陣地にゴールとなるフィールドを設定します。各陣地には黒色のラインを印刷してあり、このラインをトレースしながら、コート上に設置した赤球と青球を打ちわけていきます。赤球については敵陣へ、青球は自陣のゴールへと打ちつけるようにします。競技時間終了後、自陣に青球があれば1点加算、反対に自陣に赤球が残っていれば1点減点としました。また、青球を自陣のゴールまで弾けば2点加算、反対に赤球をゴールに弾けば2点減点とし、獲得点数で勝敗をきめました。

今年度は12名の参加応募があり、5チームに分かれてロボットの製作および自律動作プログラムを作成しました。3日目のコンテストでは、TAチームを含めた6チームによるリーグ戦をおこない順位を決定しました。1位から3位のチームを表彰するとともに、独創的な機体については「TA賞」としてそれぞれ表彰しました。例年にも増してボールの赤青の判定機構やボールを送り出す機構がユニークな機体が多かったのが印象的でした。また、ユニークさだけ

でなく正確性も合わせもっており、レベルの高い戦いになったと思います。TAにはトラブルに柔軟に対応していただき、スムーズに運営することができました。



2回生「Arduinoを用いて

ライントレーサをつくらう！」

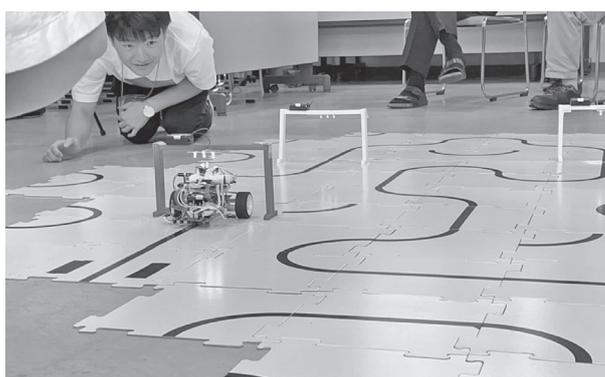
2回生は、C言語によるプログラミングや電気電子回路の基礎を学習済であることを踏まえ、それらを生かせる題材としてワンチップマイコンコンピュータによる装置の設計・製作及びその制御を課題としています。本年度も、TAを中心に独自設計したオリジナルのライントレーサを準備し、1人1台ずつ割り当て、課題に取り組んでもらいました。コントローラにはArduinoを使用し、10種以上のセンサを使用できるよう拡張

ボードを充実させています。商用キットでは回路がブラックボックスになっており教育用途には限界がありますが、すべてを自前で準備することにより、電子工作・プログラミング両面での自由度を生かしたテーマになっています。

本年度は10名の学生から参加登録がありました。初日の朝には、実習を含むArduinoのセミナーをおこない、初日の午後から3日目の朝にかけて、各学生が自分のアイデアを実現すべく製作に取り組みました。2日目の午前に、個人でライントレースのベストタイムを競う予選を行い、本選である駅伝のチーム分けを行いました。本選では、駅伝の各区間にLEDの色検出やアクション（ラインの途切れを検出し機体を回転させる）などの課題を設け、クリアできるとボーナスタイムを加算する工夫を取り入れました。走破タイム短縮のためのスピードアップと各課題の確実なクリアを両立させた完成度の高い多数の機体が、学生から発表されました。これに対して、最優秀賞（1チーム2名）、優秀賞（1チーム2名）、優良賞（1チーム2名）、区間賞（各区間1名ずつ、計2名）を贈りました。

2回生のテーマでは、コースのラインを検出し、そのラインに沿って機体を正確かつ速く動かす

事が要求されます。これを行うために、6つ以上の赤外線センサによってラインを正確に検出し、検出した情報をマイコンによって処理して、モータの回転数・回転方向を制御します。ラインの検出方法からモータへの出力に至るまでの一連の流れにおいて、電子工作・プログラミング両面での各個人の創意工夫や地道な試行錯誤が見られ、非常に奥の深い内容となりました。1回生のLEGO Mindstormsから引き続き、センシングやモータ駆動の仕組みをより深く理解することにつながっています。



3回生「倒立振子の

自動制御コンテスト」

2018年度からの新競技として、2輪型倒立振子の自動制御コンテストを行っています。この2輪型倒立振子はNational Instruments社より購入しており、ジャイロセンサ、9軸加速度センサ、ロータリエンコーダが搭載されています。参加者は3回生前期までに学んだ自動制御工学などの授業の知識をうまく生かし、倒立振子の姿勢制御プログラムの構築に取り組んでもらいました。

コンテストは、台上で姿勢制御を行い、倒れるまでの秒数で競いました。姿勢制御の持続時間やプログラミングの完成度に応じて優勝、準優勝、特別賞を贈りました。今年度は13名の参加登録がありました。3人または4人1組でチームを組み、3日間で制御理論を学び、その実装まで行います。課題が不安定系で安定させるのが難しいことに加え、今年度は機体の刷新やプログラミング言語の変更に伴い、どのチームもコンテストギリギリまで熱心に調整を行っていました。苦戦したチームが多かったものの、自由な発想のもと創意工夫が見られました。



最後になりましたが、この場をお借りして洛友会のご支援に心から感謝します。また2016年度には、洛友会OBから電気電子工学科へご寄付をいただきました。サマーキャンプの運営基金として使用させて頂いております。学科予算が限られる中、洛友会からの追加のご支援も頂いており、本サマーキャンプを継続できている状況です。みなさまのご理解ご支援がございまして本年もかわらず実施することができました。また、サマーキャンプ最終日のコンテストは大変盛り上がりです。元気な学生達を見ると、こちらも元気がなってきました。卒業生同窓会としてサマーキャンプ（初日や二日目でも大丈夫です）を見学していただくことも可能ですので、見学ご希望がございましたら是非ご連絡下さい。また、コンテストの様子をオンラインで視聴できるように環境を整えておりますのでご希望の方はご連絡ください。洛友会の方

みなさまのお越しをお待ちしております。

令和6年度電気系教室 懇話会報告

令和6年度電気系教室懇話会報告
令和6年度電気系懇話会は、教員、学生、卒業生他80名程度の参加を得て、11月祭期間中の11月22日（金）に開催された。今年度は昨年度に引き続き電気総合館1階の大講義室において開催された。同日は、午前中から「先輩と学生との交流会」が同じ電気総合館3階の中講義室と4階の北ラウンジコモンズにおいて開催されたこともあり、交流会に参加した学生の多くも懇話会に参加したようである。はじめに下田宏学科長が講演会に先立って挨拶をされた。その後、講師をお願いした吉田進名誉教授と高畑博樹氏（昭62年卒）のお二方により、大変興味深いご講演をいただいた。ご講演の概要は以下のとおりである。



「モバイルネットワークの進展とその研究人生を振り返って」

吉田 進 名誉教授



京都大学名誉教授の吉田進先生にご講演頂いた。ご講演に先立ち、電気工学専攻の松尾哲司専攻長から吉田先生のご略歴についてご紹介があった。

吉田進先生は昭和46年3月に京都大学工学部電子工学科卒業、昭和48年に修士課程を修了され、同年工学部助手、昭和53年5月に工学博士の学位を取得された。その後助教を経て、平成4年3月に京都大学工学部教授にご昇任された。平成25年3月に定年退職されるまで、一貫して移动通信基礎技術に関する研究を推進された。学外では、電子情報通信学会の会長、日本学術会議会員、総務省電波監理審議会会長、第5世代モバイル推進フォーラム会長などを歴任された。現在はテレコム先端技術研究支援センターの会長を務められ

ている。

ご講演の冒頭、吉田先生が退職の折には電気総合館はちょうど耐震工事中で、最終講義は電気総合館が使用できず、工学部の会議室を使用したことをご紹介され、今回の電気総合館でご講演できることを喜ばしく思うとお話になられた。

ご講演の前半では、移动通信の黎明期から現在までの歴史を詳しく、またわかりやすくご紹介頂いた。第一世代1GはアナログFM自動車電話から始まり、シヨルダ1フォン、1990年頃2Gは小型の端末、デジタル通信になり、2000年代には3GのCDMA、2010年代には4GのLTEなど時代に応じた方式が開発されたことが紹介された。以前は世界のすべての人に固定電話をいきたたが、それは不可能と言われていたが、それを可能にしたのが携帯電話の出現であると説明された。続いて最近の5Gへの期待の高まりと、28GHz帯の割り当てなど画期的な内容が紹介されたが、国内では28GHz帯の普及が進んでおらず、iPhoneにすでに28GHz帯の機能が搭載されている米国の違いをご紹介頂いた。令和6年1月の能登半島地震では携帯電話の設備も大きな被害を受けたが、低軌道周回衛星スターリ

ンクが切断された光ファイバーのネットワークの代わりとなったこと、また、ウクライナの戦争でも活躍し、このような機能は今後の6Gでも期待されていることをご紹介頂いた。

ご講演の後半は、これまでの国際交流を通じて感じたことをいくつかご紹介頂いた。米国の研究所に在籍する日本の研究者の数が、中国や韓国の研究者の数と比較して圧倒的に少ないこと、またそのことによる人的交流の少なさが日本外交において大きな影を落としているのではないかと、ご懸念をお話になられた。また、日本の融通の利かさや遅れる女性の社会進出を感じになられたことや、国際交流でも他国の方が長期的な視点で取り組んでいることをお感じになられたことをご紹介された。さらには、組織の壁がよく議論されるが、まず学内のコミュニケーションを大事にするべきだのご意見であった。

最後に、学生諸君に対して、若いうちから海外に出て良い友人を作ってほしい、若い時の友人は、一生の財産となる、同じ環境に安住するのではなく、常にチャレンジ精神をもって組織の壁を越えて協力、競争を進めてほしい、という熱いメッセージをもってご講演を締めくくられた。

講演後の質疑応答では、学部学生からの周波数割り当てにおける周波数オークションに関する質問に吉田先生がご自身のお考えを述べられた後、同じ分野で活躍している通信情報システム専攻の原田博司教授もコメントして大いに盛り上がった。

「私と日本の宇宙開発」

高畑 博樹氏

(宇宙航空研究開発機構)

(理事補佐(信頼性統括)・昭62年卒)



宇宙航空研究開発機構(JAXA)の高畑博樹様に日本の宇宙開発とそれに従事された高畑様の取り組みについてご講演頂いた。ご講演に先立ち、電気電子工学科の下田学科長より高畑様のご経歴のご紹介があった。

高畑様は平成元年3月に電気工学第二専攻修士課程を修了し、同年4月に宇宙開発事業団(NASDA、当時)に入社された。

入社後は技術試験衛星VI型およびVIII型プロジェクトにおいて主に静止通信実証衛星の開発・運用に従事された。平成20年4月利用推進センターETSVIIIミッションマネージャ、平成22年4月利用推進プログラム・SE室技術領域リーダー、平成27年12月光データ中継衛星プロジェクトマネージャを歴任され、令和3年7月に衛星システム開発統括、令和4年4月にチーフエンジニア兼務となり、令和5年4月からは理事補佐(信頼性統括)を務められている。

ご講演では、ご自身の経歴、JAXAの概要、今後のJAXAの取り組みについてお話し頂いた。冒頭ではNASDAに入社された経緯をお話し頂いた。研究室配属では、興味のあった電波・通信・宇宙の中で他にはない「宇宙」のキーワードのあった木村研究室(当時)を選択したこと、また、研究室では超長波(VLF)の電波伝搬の研究に打ち込んだことをご紹介頂いた。NASDAに就職することになったのも、ご自身の「宇宙」に関する興味があったためとのことである。

衛星開発に携わった理由として、NASDAに入社した頃、実用衛星のバックアップのために衛星を海外から調達するという状況にあったことから、国産衛星開発

の必要性を感じたことを挙げられた。ご講演では特に13年間従事された技術試験衛星ETSVIIIの開発に関して重点を置いてご紹介頂いた。地上との直接の移动通信確立のために開発したETSVIIIは重量が3tあること、通信のためのアンテナの直径が20mあることなど、その規模の大きさについて写真を交えてご紹介頂いた。実証実験として成功したものの、時期尚早だったためか、実用化するために必要な企業への技術移管がうまくできなかったことが残念だったとお話であった。

JAXAの事業に関する説明に続いて、最近の成果についてご紹介頂いた。研究開発実施機関としての成果としての新型ロケットH3の開発についてご紹介頂いた。H2ロケットが50号機で最後になり、H3ロケットが期待されている中、初号機の失敗があったものの、その後の打ち上げには成功しており、今後が期待されているとのことである。また、衛星の成果としてX線撮像衛星「すざく」の例を挙げられた。最近の成果としては、AIの技術を利用して過去の観測データから着陸位置を選出した小型月着陸実証機SLIM、地球を守る技術として欧州との協力で運用する「EarthCARE」計画にお

ける地上観測領域の拡大についても紹介された。このほか民間の宇宙開発支援のための宇宙戦略基金や米国主導で月面に人を送り込むアルテミス計画について触れられ、これからの宇宙開発への期待が示された。

最後には、最近問題となっていたデブリの問題についても触れられた。従来の打ち上げロケット数は年間50機だったのが、2023年には年間3000機になっていくことをご紹介頂くとともに、ヨーロッパの衛星の太陽電池パネルに形成されたデブリの衝突痕をご紹介頂いた。すでに実際の衛星は各国で監視がなされており10cm以上のデブリは観測可能で衝突の危険があると警報がでるようになってきている。年間で衛星を6回移動したこともお話しいただき、想像以上に宇宙が混雑していることをお示しいただいた。

盛りだくさんの内容で話題は尽きなかったが、ご講演途中で、迫力のあるロケットの打ち上げを是非一度見に来てください、と熱く語っておられたのが印象的だった。

講演会終了後、北部構内の生協食堂において「懇話会」および「先輩と学生との交流会」の合同での懇親会が行われた。洛友会幹事長

の北野正雄先生が開始の挨拶をされ、およそ160名が参加する盛況な雰囲気の中で賑やかに歓談が行われた。最後は電子工学専攻の米澤進吾専攻長に締めのご挨拶を頂き、名残を惜しみつつも時間の関係で解散した。



◎退職記念行事のご案内

令和7年3月31日付で、土居伸二教授、野田進教授、中村祐司教授の3名が定年退職、川上養一教授が退職されます。
左記の通り、最終講義を開催いたしますので、ご案内申し上げます。

土居伸二教授 最終講義のご案内

日時：令和7年3月7日（金）午後3時00分～午後4時30分
場所：Zoomにて開催
題目：「生物、非線形、確率、システム、そして電気工学」
（これまでの教育と研究を振り返って）

申込フォーム：<https://forms.gle/RT8u335VHWB52HA6>
連絡先：土居伸二教授
Tel：075-138831-2200
email：doi@kuee.kyoto-u.ac.jp

※完全オンライン方式で、対面では行いません。

野田進教授 最終講義のご案内

日時：令和7年3月10日（月）午後1時30分～午後3時30分
場所：桂キャンパスBクラスター桂ホール
題目：「フオトニック結晶研究37年間を振り返って」
（萌芽研究から社会実装、そして未来に向けて）

詳細はこちら：<http://www.goe.kuee.kyoto-u.ac.jp/>
連絡先：野田進先生最終講義事務局
Tel：075-138831-2318
email：secretariat@goekuee.kyoto-u.ac.jp

※対面で実施しますが、Zoomでも配信予定です。
※また最終講義の後、簡単な茶話会を催す予定です。

中村祐司教授 最終講義のご案内

日時：令和7年3月17日（月）午後2時00分～午後3時30分
場所：京都大学 吉田キャンパス 総合研究8号館2F 講義室2
Zoomとのハイブリッド開催（予定）
申し込みフォーム：<https://forms.gle/VaUdzYeoiMv122Rk8>
連絡先：松山顕之准教授
email：matsuyama.akinobu.jp@kyoto-u.ac.jp

川上養一教授 最終講義のご案内

日時：令和7年3月11日（火）午後3時00分～午後4時30分
場所：ハイブリッド開催（桂キャンパス+Zoom）
題目：「ワイドギャップ半導体の光材料物性研究に魅せられた40年」
詳細はこちら：<https://www.optomater.kuee.kyoto-u.ac.jp/>
連絡先：川上養一先生退職記念会
Tel：075-138831-2311
email：kikenka@optomater.kuee.kyoto-u.ac.jp

会員寄稿

ふるさとライフ

吉田 明生
（昭59年卒・四国支部）



くり推進隊詰問」の存在を知り、その中でも「魅力度向上部会」の活動に興味をひかれ、ボランティア活動に参加するようになりました。この部会では、まちの魅力向上に資するため、まちの魅力づくり発信拠点やふるさと文化継承推進、デジタル社会に適應するための共助など、さまざまな取り組みを行っています。

前回の寄稿から10年余りが経ちました。会社在职中に始めた「まちづくり推進隊」のボランティアや、退職後に取り組んでいる古民家再生についてご紹介します。生活の拠点は同県内で在職中と変わらず、移動時間がかかることから、現在は少しずつ活動を進めています。

まちづくり推進隊

まちづくり推進隊は、私の出身地である三豊市独自の仕組みで、平成の大合併で三豊市が誕生した折、「市民が解決できそうな課題は市民自らが取り組む、それを経済的に支援する」制度のもと、合併した7町それぞれに設立されたNPO法人です。数年前、「まちづ

祭では、栗島での子どもガイドが予定されています。秋会期の土日祝に行っていますのでご来島の際時間があれば参加してみてください。

もう一つ、デジタル社会に適應するための共助では、デジタル化された市民サービスを使える市民を増やすべく、デジタル庁が募集しているデジタル推進委員の活動に2022年度から取り組んでいます。電子地域通貨の相談会、スマホ教室などに参加しました。スマホ教室では、機種の違いや受講者の操作ミスに対応する必要があり、予想外のトラブルに直面することも多いです。判らないまま画面をタッチしてしまう人の多いこと。SNSの使い方を教えているときに、悪意のありそうな方からの友達申請があり、何かメッセージが出た、と声に出してはくれるのですが、タッチしたらダメですよ、と言う前に画面にタッチしてしまったりします。タッチしてしまった場合、根本的な対処が難しくなることが多く、心残りが発生します。ボランティアでやっている分として気持ちの整理をつけて対応していますが、講師派遣料のようなものを頂いている場合は参加を遠慮しています。

古民家再生

退職してまもなく、友人に誘われ、古民家を改装しゲストハウスとして活用することを始めまし

た。友人と共同でというわけではなく、それぞれ別々の古民家が対象です。古民家が劣化し始める前に手を入れることで多少でも収益を生む形にできれば、移住希望者の経済基盤を支えることができるのではないかと、朽ち果てて解体する家が減るのではないかと、この思いがあります。

人口が2人減ることに1軒の空き家が発生すると言われますが、実際はさらに多くの空き家が生じている可能性があります。実家の周辺でも住人のいない家が増えていきます。しかし、先祖伝来の土地は手放さないという雰囲気が残っている土地柄で、出物はほとんど無いのが現実です。幸い、実家のすぐ近くで築百年少々の建物が手に入ったので、実家の果樹園と合わせた農家民宿（農山漁村余暇法で定義されているもので、旅館業法に定められた営業許可を取得して開業する必要あり）を目指しています。

果樹園は、9000平米程度の平地で、そんなに広くはないですが、雑草に悩まされてきました。そこで、草刈が身体に与える負担を減らすため、ロボット草刈り機を導入しました。草を刈るエリアを決めるエリアワイヤーのDIYに対応してもらえたのは東北地方の除雪機メーカーでした。既存の果樹はエリアワイヤーとの離隔距離などを考えずに植えられています。

で、メーカー推奨を満足できていない箇所がありエリア逸脱して止まってしまふことが時たま発生しますが、ご愛敬です。

古民家は、現在鹿屋航空史料館に展示されている二式大艇が米軍引き渡し前に整備された施設の近くに建てられており、戦時中は兵隊さんの宿所としても使われていたようです。（今年の春に鹿児島旅行した際には二式大艇のサイズ感を体感してきました。）家財道具を残したままで引き渡しを受けたので、処分には苦労しました。実家にある必要以上の家具の整理の必要性にも気づかされました。家具類の処分には、念のため古物商の許可を取得しました。高度成長期以前の古い家具は再生して販売する需要があり、傷んでいるものでも引き取ってくれる方はいらっしゃいました。引き取り手の無い家具は解体して、古民家改装で発生する木材と合わせ、テントサウナ（公衆浴場法の許可が必要の燃料として活用する予定です。改装はDIYを基本とし、最低限の手を加えたうえで開業し、その後徐々に改善を進めていく予定です。

ポストン駐在の思い出

小泉 昌之

（平22年卒・関西支部）

皆さん、こんにちは。私はオム

ロン株式会社から、米国ポストンにあるマサチューセッツ工科大学（MIT）にVisiting Researcherとして2年間駐在しておりました。このときの経験を紹介させていただきます。

ポストンはアメリカ最古の都市の一つであり、歴史的な建物と美しい公園が点在する魅力的な街です。名門大学が集まる学術都市であり、ハーバード大学やMITが位置し、イノベーションと教育の中心地として知られています。この点において、京都と共通する部分が多いとも言われています。京都が持つ歴史的な背景や文化の深さと同様に、ポストンもまた、学問や研究の場としての重みを持っています。

食文化

ポストンの食文化は、シーフードが特に有名です。クラムチャウダーやロブスターのロールは、地元の人々や観光者に愛されており、これらの料理を味わうことはポストン訪問の醍醐味の一つです。また、ビール文化も盛んで、サミュエルアダムスが代表的な地ビールとして知られています。このビールはポストンの醸造所で製造され、アメリカのクラフトビールの先駆けとなりました。

さらに多国籍料理も豊富で、イタリアンや中華、メキシカンなど様々なレストランが軒を連ねています。その中でも、私が学生時代

に通っていた京都創業のラーメン店「夢を語れ」がポストンにも支店を出しており、他の多国籍料理店に負けず行列を作る大人気店として営業されているのを見て驚きました。異国の地で母国の味に出会えることは、何とも言えない嬉しさを感ぜさせてくれました。

ポストン

ポストンはイノベーションの拠点としても知られています。MITをはじめとする著名な教育機関が集まり、先端技術の分野で数多くの革新的なアイデアやスタートアップが生まれています。各大学は優れた人材を育成し、研究成果を商業化するための支援を行い、ポストンのイノベーションエコシステムを支える重要な役割を果たしています。

特にバイオテクノロジーや医療分野においては、ポストンが持つ強みは際立っています。多くのバイオテクノロジー企業や医療機関が集まるこの地域では、研究と実用化が密接に結びついており、医療技術の革新が促進されています。スタートアップ企業が多数存在し、資金調達やネットワーク構築の機会も豊富で、企業間のコラボレーションも活発です。

また、ポストンは多様性に富んだ文化を持つ都市でもあります。多国籍な人々が集まり、異なるバックグラウンドを持つ人々が協

力し合うことで、新しいアイデアが生まれやすい環境が整っています。このような要素が相まって、ポストンはイノベーションの中心地としての地位を確立しており、今後も世界の技術革新をリードし続けることが期待されています。環境の面で類似性のある京都も、大いに参考にできるところがあるのではないかと感じました。

日本人コミュニティ

ポストンには、日本人コミュニティが活発に存在しています。特に、医学や工学をはじめとする様々な分野の研究者が参加する「ポストン日本人研究者交流会」は、非常に刺激的な場でした。ここでは飲み会もあり、多くの情報や交友関係を得ることができました。正直なところ、ここで聞きかじった情報を自社内で話すだけでも、「彼は海外でとても視野広く学んできている」との評判を得ることができ、大変得した気分になりました。

また、駐在者の奥さんたちのコミュニティ（通称..駐妻コミュニティ）にも非常に助けられました。夫の勤務先のランクなどでマウンティングを取り合う恐ろしい場だとの噂を耳にして勝手に恐れていたのですが、実際には良い人ばかりで、たくさんの情報やつながりを得ることができました。海外でみなどこか心細い部分を持ちながら暮らし

れのコミュニティも助け合いや友人の輪を広げる精神に溢れており、私と家族にとって非常にありがたいものでした。

MITと日本人学生

MITは世界的に有名な研究機関であり、数多くのノーベル賞受賞者や著名な研究者を輩出するイノベーションの中心地として知られています。しかし、実際に身を置いてみると、「MITの研究はビジネスにならない」と揶揄されることも耳にしました。外からは華々しく見えても、日本の研究機関が抱える悩みと同様に、MITも地道な努力を続けながら研究と実用化のバランスを模索していることを実感しました。

MITの学生たちは厳しいカリキュラムに取り組み、ハードワークをこなすことが求められます。そのため、学業のプレッシャーからメンタルヘルスに問題を抱える学生も少なくありません。MITでは、メンタルケアプログラムに力を入れ、学生が健康的な生活を送れるよう支援しています。このような状況から、私が抱いたMITのイメージは、世界トップの超人集団というよりも、実直な努力家たちの集まりであるというものでした。

MITでは、日本人学生の数が極端に少ないことに気づきました。中国からの学生が多いのはもちろんのこと、韓国からも多くの

学生がMITに在籍し、厳しい研究室でも頑張りをを見せて存在感を示していました。帰国後、私が国内で就活生に海外志向について尋ねると、やはり消極的な反応が多く、日本の国際的プレゼンスの先行きについて不安に思わずにはいられませんでした。

ボストンでの経験を経て

ボストンでの生活を通じて、私は多様な働き方や価値観に触れることができました。起業家やMITの研究者、米国の会社員など、様々な人々の話を聞く中で、自身の今後のキャリアや暮らし方について考える機会が増えました。米国は経済成長を続ける国でありながら、孤立や貧困の問題も深刻で、銃を乱射する事件が毎日のように報道されています。MITやハーバードの中でも、先端技術やイノベーションの話と並んで、資本主義の限界や脱成長主義の議論が多くなされていることに気づきました。

経済の停滞や高齢化による日本の悩みは深いですが、米国で働き暮らす人々も様々な悩みを抱えていることを実感しました。自身も今後の仕事として、技術革新に取り組むだけでなく、人間の幸福との両立を考える視点を持ち、持続可能な未来に少しでも貢献していきたいらよいなと考えるようになりました。

また、京都企業の一員としては、

京都がイノベーションの拠点として盛り上がるように、そして京大や周辺大学の学生や若手技術者がMITのような海外の研究機関にも盛んに挑戦する文化が育まれていくように、何か少しでも取り組みをしていけたらよいなと考えています。



MITのコンピュータサイエンス学科の校舎“Stata Center”



ボストン名物 ロブスターロール

広島での生活を振り返って

湯村 航平
(令2年卒・中国支部)



校庭に座って課題に取り組む学生たち

私は2022年に修士課程を修了し、広島に本社を置く会社に就職しました。就職を機に広島で生活をはじめ、気づけば3年目を迎えています。奈良で小中高を過ごし、人生の大半を関西圏で過ごしてきた私にとって、広島は新しい挑戦の地でもありました。とはい

え、広島に縁が全くなかったわけではありません。私は広島で生まれ、5歳まで広島に住んでいましたし、祖母も広島に住んでいるため、幼い頃には年に数回、祖母に会いに訪れていました。また、広島カープのファンでもあり、大学時代にはカープの応援サークルに所属し、仲間と共に広島や全国の球場に観戦に行った経験もあります。広島には懐かしさとともに良いイメージを抱いており、現在の会社社との縁をきっかけに、この地

で働くことを決めました。

広島での生活は想像以上に快適でした。広島市は、関西圏に比べて街がコンパクトにまとまっており、必要なお店が揃っていて、飲食店も充実しているため、日常生活に不自由を感じることはなく、また、瀬戸内海に面しており、比較的气候も過ごしやすいため、来る前に漠然と抱いていた良いイメージはそのままでした。日常生活には大きな不自由を感じることはない一方で、広島での生活が長くなるにつれて、これまでの関西での生活と比較して物足りなく感じることもあります。そこで、広島に来てからの3年間を通して感じた広島での生活の良い点や物足りない点について述べてみたいと思います。

個人的に物足りなく感じる最大の点は、遠出のしづらさです。私は旅行が好きなのですが、関西では新幹線や飛行機を使えば、大阪から一本で目的の場所に行けるため、さまざまな場所へ旅行に行っていました。もちろん、広島にも新幹線の「のぞみ」が停車する広島駅があり、広島空港もあるので、全国的に見れば交通手段は恵まれていると思われま

なり、かなりの時間を要します。また、広島空港は市中心部から約50km離れており、周辺に駅がないため、車やリムジンバスで行く必要があります。そのため、東京駅から広島駅と博多駅の所要時間を比較すると、広島駅は200km程度東京に近いにもかかわらず、飛行機を使えば博多駅の方が早く着いてしまうこともあります。このように、時間的な制約もあり、行く場所も限られているため、広島に来てからは飛行機を利用する回数が少なくなりました。広島に来た当初は、広島港から松山に向かい、四国を一周してから岡山を経由して帰るなど、近場の旅行を楽しんでいましたが、徐々に行ったことのある場所も増え、遠出をしたいと思うことが増えてきました。

一方で、広島を魅力的に感じるポイントの一つは、スポーツ熱の高さです。先に述べたように、私はカープファンであり、野球観戦が趣味なのですが、野球のオフシーズンにはNFLを観るなど、スポーツ全般を観ることが好きです。広島には、プロ野球（広島カープ）、サッカー（サンフレッチェ広島）、バスケットボール（広島ドラゴンフライズ）、バレーボール（広島サンダース）など、多くのプロスポーツチームがあります。広島駅に着くと、お土産屋の

店主さんがカープのユニフォームを着ていたり、スーパーでカープの球団歌が流れていたり、異常ともいえるカープ熱の高さを感じられますが、最近では他のスポーツへの関心も高まっているように感じます。例えば、広島ドラゴンフライズが今年Bリーグで初優勝を果たし、新たなサッカースタジアムである「エディオンピースウイング広島」が開業するなど、スポーツに関するポジティブなニュースが増えていきます。私も新しいサッカースタジアムで観戦してみたいのですが、新スタジアム効果からか、どの試合もチケットが入手できず、未だに行けていません。プロスポーツチームの本拠地は広い土地が必要なことなどから、街の中心地から少し離れた場所に建設されることが多いように思います。一方で、カープの本拠地であるマツダスタジアムは広島駅から徒歩10分程度の距離にあり、エディオンピースウイング広島も市の中心部に位置しているため、日常生活とスタジアムとの物理的な距離の近さが、広島市民とスポーツとの距離をより一層近づけているように感じました。

広島での生活を通じて、この街には街中の利便性だけでなく、少し足を伸ばせば豊かな自然に触れられる場所が多いことなど、多くの魅力があると実感しました。また、来年春には広島駅の駅ビルが建て替わり、市中心部の再開発も

進んでいるため、広島はこれからさらに魅力的な街へと変化していく予感があります。これからの日々の社会人生活に励みながら、広島での日常や新たな発見を楽しみ、充実した暮らしを送っていきたいと思います。

同窓会だより

**昭和49年卒業
50周年同期会開催報告**

我々昭和49年卒同期は、ほぼ毎年同期会を開催しております。今年には特に卒業50周年記念ということで、京大周辺に思いをはせて、10月26日に緑がわずかに色づき始めた京都で開催し、散策会には17名、懇親会には21名の出席がありました。

散策会は、京都千年天文学街道（天文と歴史の探訪ツアー）の京大・神楽岡コースに参加しました。京都観光ガイド（京都観光文化検定1級）の辻井さんと天文博士の作花先生（昭和42年理学部宇宙物理卒・京都情報大学院大学教授）から説明を伺いました。13:00に京大時計台前広場に集合し、日本の天文学に貢献した新城先生に始まる京大天文学の流れをお聞きして、出発。吉田神社から大元宮を経て、吉田山公園の紅燃ゆる歌碑、後一条天皇陵、陽成天皇陵等を経

て、真如堂へ。大河ドラマで話題になっていく平安時代の陰陽師である安倍晴明にまつわるお話や、九尾の妖怪狐、平安時代の三個の超新星の出現等、興味深いお話をお聞きしながらしばらく休憩。坂を下り、錦林車庫前バス停へ。204番の市バスで下鴨高木町へ。

二度目となる料亭「下鴨福助」で13:00から会食。散策会をリードした世話役西の音頭で乾杯。会席料理やお酒を楽しみながら、おむね隔年で取りまどめている近況報告集に含まれていない近況を各自紹介、19:15過ぎまで歓談の後、集合写真の撮影。昔話に大いに盛り上がり、名残惜しい思いをいさながら、次回も健康で再会できることを祈念してお開きに。今回は特に二次会の設定はしていなかったため、烏丸、河原町方面に流れ解散しました。

福山 淳・西 亨（昭和49年卒）記



洛友42会

傘寿記念懇親会報告

小出 正信（昭和42年卒）

昭和42年電気系学科卒業生同期会（洛友42会）の懇親会を、都ホテル京都八条で令和6年10月29日に行いました。

関西、関東のそれぞれの地区では、同期生有志が頻繁に会合を持つたりしているものの、全体での懇親会は数年間途絶えていました。しかし、今年は80歳の節目の年になるので、傘寿記念の懇親会として、皆で集まろう、ということになり、開催する運びとなりました。

残念ながら、物故者や、体調不良で出歩けない人も多いだろうし、又、名簿では連絡のつかない人も多く、はたしてどれだけの人数が集まるか、最初は少し心配をしていました。しかし、開催予定の5カ月前から会員皆さんへのアナウンスを始めたことや、連絡の取れなかった人たちへは、皆さんの個人的なつながりで呼びかけていただいた結果、関西、関東はもちろん、中国、四国、さらには台湾からも参加していただき、当初の想定をはるかに超える32名もの同期生が集まり、確保していた会場では少し狭く感じるほどになりました。卒業後初めて会った、という人も多く、大変盛況で、皆、楽しい再会を喜んでいました。

最初に江頭英隆氏に全員での記念写真を撮影していただいた後、麻生武彦氏にご自身のライフワークであるオーロラについての講演を行っていただきました。その発光の原理や北極、南極付近で良く見られる理由、発光色などを、やさしく、詳しく、プロジェクトを使って、きれいな写真などを交え、説明していただきましたが、随分分かりやすく、大変好評でした。

講演の後、物故者への黙祷、全員での乾杯を行い、その後、各自の近況報告に入りました。この年でまだ現役で働いておられる人、新しい趣味を見つけて楽しんでおられる人、失神して風呂の中に沈み、九死に一生を得た人など、色々な経験のお話をいただきました。さすがに年齢を重ねてきた(？)だけあり、1・2分間の限られた時間の中で、ユーモアを交えながら上手にしゃべる人が多く、笑いの中で、全員が終了。その後は定番の三枝寮歌と琵琶湖周航の歌を斉唱して、全員そろってのプログラムは終了しましたが、会場は30分ほど余裕があったので、その後も二次会として自由席で三々五々、語り合いました。

日本人男子の平均寿命は81歳とか。我々もあと何年元気にいらられるのかわかりませんが、できるだけ頻繁に、昔の仲間がそろって楽しめる時間を持ちたいもので

す。元気に健康で長生きして、ぜひ次回の東京での洛友42会で再会しよう、と約束して散会しました。本会の開催にあたり、洛友会から支援金を賜ったことに感謝いたします。



昭和44年入学者同期会を
奈良で開催

昨年の熱海に続き、11月7日、インバウンドで観光客が溢れる奈良にて同期会を開催しました。晩秋まで続いた残暑で紅葉は未だでしたが、伝統の正倉院展の開催期に、全国から22家族27名が集まり、古都満喫の「大人の修学旅行」となりました。

卒業後、既に半世紀が経過し、もはや顔と名前の一致が難しい中でも、関西の迎賓館、奈良ホテルでの飲み放題の懇親会、続くバー

での二次会を経て、大いに話はずみ、さらに学生時代のほぼ全員の写真回覧もあり、一気に全員旧知の仲に戻りました。驚かされたことに、皆さん多趣味に加え、まだまだ学生気分充溢の人が多く、「日本の未来のため」、AI研究に勤しむ人達が研究会を形成するなど、「心身ともに元気一杯」でした。

同期会および前後の日には、「光の君」藤原家の氏神である春日大社の特別参拝を含むガイド付きツアーや、若草山の裏庭で鹿の親子をみながらの連日ゴルフ、明日香、長谷寺や橿原神宮まで脚を伸ばす人等、各自が古都奈良を満喫されました。

来年は、同期が活躍中の台湾の予定です。

和田 豊(昭48年卒)記



支部だより

九州支部懇親会報告

令和6年9月23日(月)、福岡市博多区のオリエンタルホテル福岡博多ステーションにて、九州支部の懇親会を開催しました。今回のハイブリッド(対面+リモート)開催では、8名が集合、1名がリモートで参加されました。



河川の状況を面的に把握し、適切な時期に樋門の開閉を遠隔制御実施できる技術の開発・実証についてお話いただきました。当取組は福岡県直方市で実運用されており、直方市主要域をカバーするLPWAネットワークが構築されており、質疑では、行政との連携やシステムのパッケージ化による全国展開の可能性等、各専門分野に応じた意見が飛び交い、活発な議論が交わされました。



参加者全員で酒を酌み交わしながら、終始和やかな雰囲気での懇談は進み、話題は再エネ、健康、物価高など多岐に渡りました。また、東さま(昭54年卒)より令和6年京都大学福岡同窓会福岡講演会のご案内も実施していただきました。楽しいひとときもあっという間に過ぎ、東さまの締めで懇親会を締めくくりました。

今回は1月に懇親会を開催する予定です。多数のご参加お待ちしております。

田中仁志(平22年卒)記

第122回関西支部 ゴルフ競技会報告

〈プレー状況〉

第122回関西支部ゴルフ競技会が令和6年10月19日(土)宝塚クラシックゴルフ倶楽部にて開催されました。

過去の競技会では、雨に降られたことはほとんどなかったのですが、今回は、午前中は曇り、午後には雨の予報でした。当日は、アウトは伊藤氏(S34年卒)、インは平嶋氏(S38年卒)の始球式でプレーを開始し、合計17名(うちシニア5名)が楽しく競技に汗を流しましたが、スタート直後から雨が降り出してしまい、午後から雨が激しくなることが予想されましたので、午前中でプレーを切り上げることとなりました。

順位はハーフのスコアで決定し、結果は次のとおりとなりました。(敬称略)

- (シニアの部)
 - 優勝 吉田 豊彦 (S56年卒)
 - 2位 伊藤 俊一 (S34年卒)
 - 3位 北野 徹 (S44年卒)
- (一般の部)
 - 優勝 西田 篤史 (S63年卒)
 - 2位 杉本 幸薫 (H23年卒)
 - 3位 岩根 裕典 (H13年卒)

また参加者は次のとおりです。

〈敬称略〉

- S34 伊藤 俊一
- S38 平嶋 正芳
- S44 北野 徹
- S56 美濃 由明
- S56 吉田 豊彦
- S63 西田 篤史
- H4 下田 一彦
- H5 前田 徹
- H7 一木 将人
- H9 中山 正人
- H13 岩根 裕典
- H18 大和田 淳
- H23 杉本 幸薫
- H24 井上 智弘
- H27 依田 学樹
- H29 藤田 秀真
- H30 喜多 謹仁

〈懇親会〉

プレー終了後、下田氏(H4年卒)の司会により、表彰式兼懇親会が開催されました。

懇親会は伊藤氏(S34年卒)の乾杯のご挨拶からはじまり、表彰式では、吉田氏(S56年卒)、西田氏(S63年卒)より優勝報告を頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる発展を期待するコメントを頂きました。

〈お知らせ〉

洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回(春・秋)にゴルフ競技会を開催しております。次回は令和7年5月

17日(土)を予定しております。同期などお誘い頂くことで老若男女を問わず多数ご参加頂けることを心待ちにしております。

〈連絡先〉

下田 一彦 (H4年卒)
藤田 秀真 (H29年卒)
連絡先 070-24746134 (藤田)
fujitashunuma@ekkansai-rd.co.jp



第122回 関西洛友会ゴルフ競技会 参加者集合写真

令和6年度 関西支部見学会 報告

関西支部において会員相互の交流を目的とした見学会が令和6年11月17日(日)京都鉄道博物館にて開催されました。

〈見学会〉

前日までの雨予報を心配していましたが、当日は天気恵まれ11月とは思えない暖かさで絶好の行楽日和の中、会員34名とご家族22名、計56名の方々にご参加

いただきました。鉄道の歴史や技術に触れる展示を楽しみました。特に、本物の訓練ながらの運転シミュレーターや、実際の1/80スケールの鉄道模型が走行する鉄道ジオラマ、蒸気機関車が牽引する客車に乗車するSLスチーム号への乗車には多くの方が興味を持ち、大人だけではなく参加された子供たちも大喜びでした。また、館内では鉄道の発展とその裏にある技術革新について学び、参加者からは「懐かしい」「新しい発見があった」といった声が多く上がっていました。

〈昼食会〉

ザロイヤルパークホテル京都梅小路にて行われ、安藤支部長(S59年卒)の乾杯のご挨拶からはじまり、美味しい料理を堪能し、参加者同士の会話も弾み、笑い声が絶えない楽しいひと時となりました。最後に西田副支部長(昭和63年卒)から締めのご挨拶をいただき、散会となりました。今回、昭和38年卒から平成26年卒まで、またご家族を含めすと下は3歳まで、幅広い世代の皆様にご参加いただき、大変和やかな雰囲気の中で有意義な交流を図ることができました。



令和6年度 洛友会関西支部交流会 参加者集合写真

訃報

昭25	西岡 博	6・8・17
昭28	侯野 経一	6・4
昭30	黒田 悟弘	6・10・10
昭34	村尾 久	6・6・25
昭35	田邊徳右エ門	6・5
昭35	西尾 秀和	6・2・8
昭36	川波 充	6・9・23
昭43	富田 眞治	6・9・21
昭53	小野寺 秀俊	6・10・7

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

